

オリ主 「一夏、俺は思
うんだ」 一夏 「……何
だ？」

通りすがりの変態

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通り、オリ主くん（作者）が思い付いたことを一夏くんと話すだけの小説で
す。

目 次

オリ主「一夏、俺は思うんだ」 一夏「……」

何だ？」 オリ主「ISスーツつてエロく
ね？」

1

オリ主「一夏、俺は思うんだ」 一夏「……」

またか、何だ？」 オリ主「ご飯つて、旨

5

オリ主「一夏、俺は思うんだ」 一夏「ま

たか、何だ？」 オリ主「……すまん、言

いたいこと忘れた」

10

オリ主「一夏、俺は思うんだ」 一夏「えつ

と、どうした？」 オリ主「甘いものつて、

うまいよな」

15

オリ主「一夏、俺は思うんだ」 一夏「……何だ？」 オリ

主 「ISスースつてエロくね？」

「一夏、俺は思うんだ」

「……何だ？」

「ISスースつてエロくね？」

「……ああ、うん、そう」

いきなり何を言い出すんだこいつは。

「いやさあ、あれどう考えてもボディラインつていうか、体つきがはつきり出るわけじや

2 オリ主「一夏、俺は思うんだ」 一夏「……何だ?」 オリ主「I Sスーツってエロく

ん?」

「まあ、なあ。着てると結構蒸れたりするし……」

「分かる、暑い日の授業とかマジチヨベリバつてやつ

「おう……何だつて?」

「そんなことはどうでもいい」

乗つてきたのはそつちだろに、いきなり打ち切られたぞ。
「でさあ、さつきも言つたけど体つきはつきり出るじやん」

「まあ、確かに」

「な、考えるだけでエロいだろ?」

「……うーん、まあ、そう、なのかな?」

でも、確かに普段意識していないだけで、意外とそうかもしれない。

「こういうのつて、スク水とか競泳水着に通ずるものがあると思うんだよ

「ああ、あれもピッヂリするもんな」

「そうそう、見えないからこそ妄想できる!つて意見も否定はしない。だけど、こういう

風にはつきりと分かる、つてのもまた一興だと思わんかねワンサマー君」

「なんで英訳なんだよ。……まあ、言いたいことは分からんでもないな」

「……何でこういう趣向は理解できるのに恋心は分からんなんだ?」

「何か言つたか？」

「いんや？」

「……？ 何か、目の前で小声で言われると気になるんだけどなあ。

「話を戻そつか。俺は更にここで持論を言いたい」

「何だ？」

『密着型衣装におけるエロさや萌えは着ている本人の羞恥心などに比例する』

「……？ 訳がわからん

ちよつと何言つてるかわからないな……

「まあ、要するに着てている本人が「ああ、はつきりと体つきとか見られてるな、恥ずかしいな」とか、「何でこつち見てるんだろう?」とか、そういうので方向性は変わるつてことだよ」

「羞恥心がミソつてことか?」

「そう、前者は辱しめることによる喜び、いや悦びとか、そういう方向になるな。後者は、いわゆる無自覚系つてんのかな? 自分の魅力に気づいてないから故の魅力だな、割りと好みははつきりと分かれるな」

「ふうーん……」

「……ふうーんておま、お前も分かるだろ? 同じ男子高校生としてさあ」

4 オリ主「一夏、俺は思うんだ」 一夏「……何だ?」 オリ主「I Sスーツってエロく

「……いや、まあ、分からんでもないぞ?確かに、そういう風にピツチリした衣装とか、それによつて浮き出た体つきとか、そういうのに惹かれるつてのは非つ常に分かる」

「だろ?」

「そう、分かる。めちゃくちや……とまではいかないが、俺も一男である以上、そういう趣向は分かる。だがな……」

「人が気持ちよく寝てたところを叩き起こしてでも話したい内容だつたか?」

「すいませんでしたー!」

オリ主「一夏、俺は思うんだ」一夏「……またか、何だ

「一夏、俺は思うんだ」
「……またか、何だ？」

「ご飯つて、旨いよな」

6 オリ主「一夏、俺は思うんだ」 一夏「……またか、何だ?」 オリ主「ご飯って、旨

「分かる」

「また変なことを言い出すのかと心配したのは杞憂だったよ。

「こう、さ。特別に、格別に旨いつて訳じやないんだ、でも何か、おかずと合わせると旨いよな」

「分かる、米そのものが自己主張する味じやないから、何か自己主張激しい味のおかずだとなおよし」

「分かりみが深い」

「いやー、晩飯食べたばつかなのに、お腹すいてきたな……」

「明日の晩はガツツリ行こうぜ」

「いいねえ♪」

「晩で思い出したけどさあ」

「ん?」

「一夏はこう、ご飯といえば! つておかずとかある? ちなみに俺は唐揚げ……つてか、肉類だな」

「分かる、めっちゃ分かる! 肉とご飯つてめちゃくちゃ合うんだよなあ……」

「アツツアツの肉を頬張つてご飯をかきこみ、冷たいお茶で一服……ああ、俺も腹すいてきた……」

「腹すいたなあ。ご飯といえばさ……」

「何だ？」

「味噌汁とかいいよな」

「めちゃくちゃ分かる」

「味噌汁とご飯に更に自分の好きなおかず、これはもう至高だと思う」

「分かる、いいよなあ。あつたかいお味噌汁でほつと一息つく……」

「寒い日とか、お味噌汁がめちゃくちゃありがたいよな……」

「分かる……外で実習授業とか受けた時とかな」

「ISスース、露出が激しいからな……薄い割に断寒性はいいんだけどなあ」

「足とかは出てるし、女子はあれ基本肩だしだろ？ あつちはもつとキツいと思うぜ」

「いやー、それも分かるんだけどな、あつちは腹は隠れてるじやん？」
「あー、俺たちのISスース、腹だしだもんなあ……」

「めちゃくちゃ冷えるんだよなあ……」

「でも、その後に飲むあつたけえお茶とお味噌汁の旨さよ……」

「冬場は冷えるから、食堂のおばちゃんたちがお茶、あつたかいのにしてくれ
るんだよなあ……」

「食堂のあちこちで、「はあー……」つて声？ 息？ どっちか知らんけど聞こえるもんな

……」

「ほつとするよなあ……」

「ほつとするなあ……」

「ああ、ヤバイ、本格的にお腹すいてきた……
明日の晩は何にする?」

「お、珍しく一夏から振つてきたな。俺はなあ……チキンカツ定食にしようかなあ」
「いいねえ、揚げ物も合うよなあ」

「そうそう、天ぷらとかな」

「ああー、天ぷら! いいな! うーん、俺は天丼にしようかな」

「お、いいじやん! 俺にもちよつと分けてくれよ!」

「しようがねえなあ、代わりにチキンカツ何切れかくれよ?」

「いいぜ! うーん、何もらおつかなあ……」

「こんな感じで、俺たちは飯談義に花を咲かせるのだつた……」

「――で、遅刻の言い訳は終わりか?」

「すいませんでしたー!」

後日、寝坊して千冬姉ちふゆねえにこつてり絞られたのは別の話。

10 オリ主「一夏、俺は思うんだ」 一夏「またか、何だ?」 オリ主「……すまん、言いと忘れた」

オリ主「一夏、俺は思うんだ」 一夏「またか、何だ?」

「一夏、俺は思うんだ」
「またか、何だ?」

「……すまん、言いたいこと忘れた」

「忘れたのかよ!」

ビックリした、別の意味でビックリした!

「いやー、すまん。たまになつちまうんだよな」

「……ああー、でも分かるかも。パツと思い付いたことつて、忘れやすいよな」

「そうそう、思い付いて、共有しようとして相手呼んだら忘れちゃうんだよ」

「あー、俺もやつちやうなそれ。前にシャルと話しててさ」

「うん」

「ふと何か思い付いたんだよ」

「うん、それで？」

「それで話そうと思つて名前呼んだんだよ」

「ああー、オチが読めた」

「想像通り、話したいこと忘れちまつたよ」

「気まずいやーっ」

「あの後にごめんつていうの、気まずいというか、恥ずかしいというか……」

「微妙な感じだよなあ」

「そうそう、それ」

「微妙な感じエピソードといえба……」

「それ語呂悪くないか？」

「うん、言つてて思つた。でさあ、この前セシリアと飯食いにいつたんだよ」

「お、外食か？」

「いやいや、食堂だよ食堂」

「ああ、やっぱり？」

「分かつてたのかよ。まあいいや、でな？俺はその時焼き鮭定食、セシリアはなんかのス

12 オリ主「一夏、俺は思うんだ」 一夏「またか、何だ?」 オリ主「……すまん、言いと忘れた」

「パゲツティードつたんだよ」

「うんうん」

「でな、セシリ亞の方が先に並んでたんだよ」

「おう」

「でさ、この作品^{I S 学園}の食堂つて、フードコート形式じやん?」

「おう、食券の半分渡して、できたら呼ばれるから受け取りにいくつて形式だな」「でさ、待ってるわけじやん?」

「ああ、オチが読めた」

「ご察しの通り、後から並んだ俺の方が先に呼ばれたよ」

「気まずいよなー」

「セシリ亞は気にしないで食べていいって言つてくれたけどさあ……」

「食べづらいよな、分かる」

「こう、ファミレスとかで自分が後から頼んだのに先に自分の料理が来たときに通ずる何かがあるよな」

「でも、どつちかつていうと逆の方が多いんじやないか?」

「ああ、分かる。何か、敗北感というか……悔しさというか……あるよな」

「いや、そこまではいかないだろ……」

「そうか？俺はやだけどなあ」

「まあ、料理は時間かからないものかかるものではつきりと分かれるからなー」

「そうだよなー。でも自分の好きなもん食いたいし、でも相手より先に来たらーって思うとなあ」

「難しい……」

「……なあ、一夏」

「うん？」

「……腹へつた」

「え？……あ、もう昼時か。意識したら腹へつてきたな」

「食堂行こうぜ、早くいかねえと混雑するからな」

「おう、行こう行こう」

「何食べる？」

「んー？野菜炒め定食かなあ」

「俺は……炒飯・ラーメン&餃子セットにするわ」

「おいおい、確か昼食後の授業つて……」

「大丈夫だ一夏、問題ねーよ」

「……大丈夫かあ？」

14 オリ主「一夏、俺は思うんだ」 一夏「またか、何だ?」 オリ主「……すまん、言ふと忘れた」

「うう……腹いてえ……昼飯の後にISの実習なんて聞いてねえよ……
「言わんこつちやない……」

オリ主「一夏、俺は思うんだ」 一夏「えつと、どうした

「一夏、俺は思うんだ」
「えつと、どうした?」

オリ主「甘いものって、うまいよな」

「甘いものって、うまいよな」

16 オリ主「一夏、俺は思うんだ」 一夏「えっと、どうした?」 オリ主「甘いものっていよな」

「美味しいよな」

本日はお菓子、かな?

「甘味つてどうしてこう、人を惹き付けてやまないんだろうな」

「甘いものは基本美味しいからな……」

「甘いものは別腹とはよく言うよな」

「何か、見るとお腹空くんだよなあ……」

「分かる、何か減っちゃう」

「そして食べてズブズブに太っていく……」

「ヤメロー! 夢のない話はやめるんだ!」

「まあ I S 動かしてると結構カロリー使うけどな……」

「セシリアは特に甘いもの好きだよな。ピット使うし脳に負担掛かるんかねえ」

「脳を動かすと甘いもの欲しくなるって言うよな」

「聞いたことあるな……」

「そういやさ、ラウラは茶道部なんだよ」

「ああー、そうそう。ラウラは茶道部だっけ」

「話聞いてるとさ、お茶請けのお菓子の話出てくるんだよな……」

「ああ、お茶請け! あれなあ、美味しそうだよなあ」

「でもラウラ曰く単品じや甘過ぎらし、緑茶と合わせて丁度いいんだってさ」

「緑茶つて苦いからな……お茶請けも甘くなるよ」

「何かその言い方だとお茶請けが親みたいなんだけど」

「じや緑茶が子供か」

「……何の話してんだ俺らは」

「さあ？ ラウラで思い出したけどシャル料理部だつたよな」

「そうそう料理部」

「前に貸し出しで料理部行つたときにバチクソ砂糖使う人いた」

「それアカンやつ、絶対アカンやつ」

「予想通りシャルと俺と部長さんと作つた当人とで悶絶しながら食い切つた」

「甘過ぎるのはきついよな……」

「こう……俺だけかもしけんけど、脳が殴られたみたいになる、甘い！ ってガンつてくる」

「甘過ぎると食えたもんじやない」

「しかもその人見てない隙にメープルシロップとガムシロップ突っ込んでたらしくてさ
……」

「ううわアカンやつ……」

18 オリ主「一夏、俺は思うんだ」 一夏「えっと、どうした?」 オリ主「甘いものっていよな」

「口の中で甘味と合成甘味がダンスしてた……それもかなり激しいやつ」「例えがよく分からんが、御愁傷様……」

「甘味といえбаお菓子だけどさ、洋菓子和菓子あるよな」

「あるな、俺は和菓子好きだな」

「俺は洋菓子、ケーキとか大好き」

「ケーキか……チヨコケーキ好きだな俺は」

「俺はチーズケーキ」

「ああ、美味しいよな……」

「和菓子なら饅頭が好きかな、こしあん」

「俺はつぶあんだな」

「どつちもうまい」

「あんこ万歳」

「あとはようかん……和菓子つて結構あんこ使うなあ」

「大福とかな」

「明日せつかくだしデザートで何か頼もうぜ」

「そうしようぜ、つかそろそろ寝る時間じゃん、お休み」

「あほんとだわ、寝ないと織斑センセにどやされる、お休み」

「やばい……思つたよりも甘い……」

「さすが I.S 学園、菓子作りの技術も一級品か……！」

後日、予想よりも甘かつた学園食堂のスイーツに苦戦するもはまつてしまふ俺たちであつた……